



多様性，多文化，多層性，多重性と向き合う， という自己覚知と自己開示



著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

私からご紹介したい映画は、ヴィゴ・モーテンセンとマハーシャラ・アリのダブル主演で話題となった「グリーンブック」です。

この映画は、人種差別が激しかったといわれる1960年代のアメリカを舞台に、黒人ジャズピアニストのドン・シャーリーと、白人のイタリア系移民であるトニーの交流を中心に描いたロードムービーとなります。アメリカ南部のコンサートツアーに出かけた彼らが、社会の有り様という「自分の外側にある世界」に直面し、闘い、もがきつつも、やがて、「自分自身の内側」にも向き合っていくというストーリーが、概略となります。どうも、実話に基づく映画のようです。

この作品を、「(単なる)人種差別の映画」として語ってしまうと、私の捉え方と大きく異なってしまうでしょう。無論、この映画が、かつてはびこった人種差別を、あるいは、今もどこかしこに残る人種差別をさりげなく批判し、皆で改めんとする強いメッセージを発していることを否定する気は、毛頭ありません。ただ、本稿では、「かくも差別が人を苦しめる」という理解以外に、焦点を絞ることとしたいのです。それは、「人種差別」という事態を俯瞰することより、「差別をする/される」という実態の中で生きる人々の主観なり客観の方に、私の興味が強く傾いたからなのです。

多様性，多文化，多層性，多重性

ところで、この頃、『多様性』をいかに理解するかが、今後の地域社会のカギとなる」とか、『多様性』を包摂していくことこそが、これからの地域づくりである」といったフレー

ズを、あちこちで耳にするようになりました。この「多様性」は時に、「多文化」という言葉に置き換えられたりもします。また、「多層性」とか「多重性」という言葉も聞く様になりました。

多様性，多文化，多層性，多重性。

言わんとすることを強調するために類語が並んでいるのか、あるいは、それぞれの意味は実は大きく異なるのか、正直、私にはよくわかりません。ただとにかく、いろいろな違いを乗り越えていくこと、あるいは、受け入れていくことが、重要視されていることだと理解していますし、概ね納得もしています。そのような視点なり、感性なり、礼儀なり、作法なり、行動なり、習慣なり、常識なり、文化は、グローバル社会においてもローカル社会においても必要不可欠なことなのだろうと、私も考えております。

その一方、そして先に記した通り、多様性だか、多文化だか、多層性だか、多重性という「こと」だか「もの」を、どのように理解すればいいのかについては、まだまだ疑問を感じております。意味や理念や概念としてのそれらではなく、私が生きる「日常生活における1つ1つの振る舞いやかかわりの中で」、という捉え方においてです。私の生活と人生における、多様性、多文化、多層性、多重性とは、一体なんなののでしょうか？

私も地域社会の成員の一人として、また、職業人、社会人、家庭人、息子、弟、兄、夫、父親という属性のもと、老若男女、数数えきれない方々と日々かかわりをもたせてもらっております。ですが果たして、私は、多様性、多文化、多層性、多重性とやらを踏まえた営みができているのでしょうか？

映画「グリーンブック」では、人種の違いを大きなテーマとしていました。私も、記憶の中では小学生の時に初めて、同じ小学校に通ったベトナム人、ドイツ人、アメリカ人と関わって、「人種の違い」を肌で体験しました。まさに、肌の違いに基づいて、「自分（の色）と違う！」と意識したのです。

それは、その方々とのかかわりにおいて、ある種の緊張感を生みだしました。緊張なり思考を伴わせて、私は彼らと、かかわったのです。「（自分と彼らの）爪はどう違うのかな？毛根も違うのかな？、あれ？でも鼻の高さはたいして変わらないじゃん」と、自分や自分とおなじ日本人（黄色人種？）と彼らの身体的違いに注目したのです。

でも、そのような注目も、すぐに消失してしまいました。ある程度彼らを見つめて、彼らと私の身体的特徴の違いを把握してしまえば、「多少の違い」が明らかになっただけで、それ以上の興味など生まれることなどなかったからです。でも、ドッチボールや陸上競技を通じて、彼らのパフォーマンスに体力的技術的に負けることがあると、「彼らはもともと（日本人より）体力的に優れているから仕方ない」という理屈を、何度となく使ったこともありました。今思えば、単なる言い訳でしかありませんが。

いずれにせよ、彼らと友人になって以降、人種の違いは、私にとってさほど大きな問題でも、大きな関心にもなりません。彼らと「仲良くなれる/なれない」、とか、彼らを「好きか/好きでないか」、という次元において、人種という要素はまったく関与しなかったです。

この頃に出会ったベトナム人の X さんは、当時の私にとって、大変好感度の高い人物の 1 人でした。残念ながら中学に進学してからは、X さんとの接点がなくなってしまったのですが、中学にいても、高校に行っても、大人になってからも、X さんに対する気持ちは揺るがなかったのです。そして最近知ったのですが、私の息子の友達の一部が、この X さんの妹の子どもであることがわかりました。不思議な縁を感じました。X さんと初めて出会って 40 年弱が過ぎていて、そもそも X さんとはたった 2 年ほどしか交流がなかったはずなのに、…人の縁とは実に不思議なものです。

大学時代の思い出を語るならば、その頃、私に一番優しくしてくれた他人種（私とは異なる人種、という意味で便宜上用いた表現）は、黒人の Y さんでした。彼とはウェストフロリダ大学で出会いました。とても親切で、紳士で、素敵な人でした。私と同じ年とは思えないくらいしっかりした方でした。

時はビル・クリントン政権の時代でした。Y さんが実に冷静に、そして見事に、クリントン政権のあり方を批判し、（主に人種差別や経済格差についての）社会の有り様を憂っていました。それらを見聞きして、正直、私は自分が恥ずかしくなりました。なにしろ当時の私の悩み事といったら、就職や進路より、友人関係、親子関係、そして恋愛についてなど、極めて個人的なことばかりだったからです。世間や世界についての悩みなど、まだどこかで「自分にはまだちょっと早い」とか「難しい」とすら感じていたからだと思います。Y さんの大人っぽさに、あこがれに近い感情すら、抱きました。

また、彼は、金銭的に余裕がない私に、さりげなく受容的でした。当時、ある程度お金が使える（他の日本人の）方々は、（主に白人のアメリカ人と共に）週末は動物園に海岸にと、頻繁に行楽に出かけていました。しかし、そんな余裕などない私はいつも、彼らが出かけた後、人目を避けるように、1 ドルでペプシ 1 本とマフィン 1 つを買えるベンディングマシンの前で、食事を済ませていたのです。

ハッと気づくとそこには、私と同じように金銭的余裕がない人たちが集まっていました。大半が黒人の方々でした。Y さんもその一人だったのです。貧乏に引け目を感じていた私を、皆は、さりげなく受け入れてくれたようでした。もっとも、彼ら自身も決して裕福ではなかったようです。

私たちはいつしか、ベンディングマシンの前でジカ座りして、右手にペプシだかコーラを、左手にマフィンをもって、語るようになったのです。その時の会話は、実にたわいもない内容で満ちていました。でも私にとって、とても心地の良い内容でした。各家庭の経済的な厳しさもそうですが、親兄弟の関係で悩んでいることであったり、自分の夢であったり、今思えば、実に若者らしい会話が飛び交っていたのです。そして、それぞれが語るストーリーに、自信と不安がミックスしていました。ここでの自信とは、「自分はこう生きたい！こう生きる！」といった決意のような哲学的なものでした。不安とは、「金銭的事由、あるいは機会不均等がゆえに思い通りに生きられない。他者に理解してもらえない。将来の先行きが見えない」といった内容でした。実に生々しい、いわゆる、「人間のリアルな声」が聞

こえきて、私は、人種や国境を越えたつながりを感じたのでした。

その後、大学のイベントで、日米交流サッカー試合が開催されました。その時、私がゴールを決めたら、Yさんら皆がそれをととても喜んでくれて、祝福してくれたことが、私を感激させてくれました。私は彼らと一緒に、(生まれて初めて)サブウェイのサンドイッチを食べて、心から「美味しい」と感じました。その旨さに感動しました。こんなうまいサンドイッチがあるなんて、とびっくりしたのでした。

裕福そうな白人らが落胆している横で…笑。

私の中の多様性、多文化、多層性、多重性

映画「グリーンブック」の話に戻ります。

私にとっての、多様性、多文化、多層性、多重性とは何か、…正直、説明できません。できるといえばできるけど、できないといえばできないのです。私と、私以外の他者の間における、多様性、多文化、多層性、多重性とやらかかわる違いは、あるといえばあるし、ないといえはないのです。少なくとも、私はそう感じているのです。

映画の中で、ドン・シャーリーとトニーは当初、人種の違いを気にしたり、または、それに惑わされたりしていました。時に、その違いを気にしないように、その違いに負けないように、自身を律してもいました。その過程を通じて、お互いがお互いの新たな一面を知って、受け入れ難さを感じたり、自身との共通点を見出したり、そして、受け入れたいと願って、垣根を越えていくのでした。

そのような彼らの内的な変化と、その変化に伴う彼らのかかわりの変質が、私にとっての最大の関心事となりました。すなわち、彼らの自己覚知、自己開示こそが、私にとってのこの映画の主題だったのでした。

人種差別や偏見といったことは、当事者というよりむしろ、「他者が評価する事態」といったほうが、適切なことが多いのではないのでしょうか？少なくとも私の体験知は、そのように感じております。

映画の中で、ドン・シャーリーとトニーの両方が、差別なり偏見を、少なからず有していました。どっちが正しいとか、正しくないとか、そういった問題ではないように感じました。差別なり偏見は、多かれ少なかれ、皆、有しているのではないのでしょうか？もしそうであるならば、そしてさらに飛躍して、もし、「差別・偏見、良くなし、当然、それらを有している人も良くなし」という論理がはびこることになったならば、私を含めて大半の方が、その「良くなし」に該当してしまうのではないのでしょうか？

こういった論理は、まさに、私の単なる考えすぎなのでしょう。でもなんだか私は、そんな論理にとらわれて、なんだか、生きづらさを感じるのです。「差別・偏見良くなし」と、自分や他人が有しているなにかを、まるで「弱い者いじめ」のように探し出し、攻撃？排他？しようとするような感覚に襲われるからです。

私は、そんな論理よりも、ドン・シャーリーとトニーの両方が、自分自身がどんな感性、

嗜癖、志向を持っていて、その一方、どんな感性、嗜癖、志向を（知らず知らずのうちに）排除していたのかに「気づくこと」に、注目したいのです。その気づきの過程こそが、とても大事なことだと感じるのです。

自分を知っていく、気付いていくという「自己覚知」と、そこで得た気づきに基づいて生き方を変容させていくという「自己開示」、この2つの営みを一人一人が徹底することが、多様性、多文化、多層性、多重性とやらを理解し、体現することになるのではないのでしょうか？私は、そう思うのです。そして、それがゆえに、自分の内側を突き詰める探求だか冒険こそが、差別・偏見に立ち向かうことになるかと考えるのです。

差別・偏見を無くそうとするならば、自分以外の誰か、またに何かに、目を血走らせるより、自分の内側のどこにそれが眠っているのかと探し続けて、その過程を告白しつづけることのほうが、結果として自分以外を受け入れやすくなるのではないのでしょうか。結局、変えるべき対象とは、自分自身しか、ないのではないのでしょうか。

そういった視点に基づいた時、映画の中で必死に生きるドン・シャーリーとトニーのかかわりが、私にとって、他人事ではなくなるのです。ああ、彼らはまさに、「私自身なんだ」と、感じられるのです。

ぜひ皆さんにも、この映画を見ていただきたいです。そしてそれに際し、上で記した、私の主張を踏まえてもらったうえで、皆さんが映画のラストシーンをどう受け取るか、…ぜひお尋ねしてみたいものです。ドン・シャーリーはどんな気持ちで、決意で、トニーを伺ったのか、そしてトニーはどんな気持ちで、決意で、ドン・シャーリーを部屋に受け入れたのか、ぜひ皆さんのお考えをお聞きしたいものです。

—つづく—